図書館だより

上田女子短大
附属図書館

上田女子短期大学
図書委員会　発行

二冊の本

関　克彦

私が若い頃感銘を受け、今なお愛読している二冊の本について書いてみたい。

その一は『劉生画集及芸術観』である。

この本は、大正九年聚英閣発行であるが、絵が好きで、自分でも描いていた父が、これを購入して読んでいたので、しぜん私もこれに親しむようになった。当時、小学校の校長をしていた父の給料は、履歴書で調べてみると六十円だった。この給料から大枚十二円のこの本を買うには相当の決断を要したものと思われるが、お陰で私としてはありがたかった。その頃、私はまだ十五・六歳の少年であったが、劉生の絵の迫力に打たれ、序文の第一行に書かれている次のことばからも、異常な感銘を受けた。

――新しきものは概念より生れず、「心」より生れるものこそ永遠の新鮮なり――

私は、いまもへたな絵をかいているが、絵というものは心の産物でなければいけないと信じているのは、この本の影響によるものである。

その二は『聖書』である。

私が長野師範の学生のとき、長野市の今の県立図書館のある場所に、師範の寄宿舎の二寮があった。私は一年生の時からこの寄宿舎にはいったが、ここは学校の敷地内にある本寮とは異って、学校から離れていたので、毎日かばんを下げて登校し、放課になると下宿へでも帰るような気安さで寄宿舎へもどった。だから、私どもは幾棟かある寄宿舎の中で、この二寮は別天地であると思っていた。

世の中がまだ自由な明るい気分のある頃で、寄宿舎での私たちの生活にも自由さがあり、楽しさもあった。寄宿舎の朝夕には、きまった自習時間があって、その時間はみな静粛にしたが、それ以外の時間はいろいろなことをしてにぎやかに遊んだ。たとえば、夜の八時半に人員点呼が済むと、よくあちこちの部屋から大声でジャンケンをする音が聞こえたが、これは通称「募集」といって、仲間から十銭ずつ集めて菓子を買いに行く役をきめるためのものである。当時は、夜でも店は戸を締めなかったから、門限前の時間はよく町へ出て菓子などを買ってきたものだった。寄宿舎にいる学生にとっては、およそ食べることは楽しみで、秋の土曜日の夜などは「とろろ」の大食会などを催し、そのあとは大低大声を張り上げてけいきよく寮歌など歌ったりした。また、寮マッチと名づけて寄宿舎対抗の競技をやり、若者の血をたぎらせ、その日はとくに夜までばか騒ぎを続けたものである。

ところが、このような自由な雰囲気のなかで、仲間といっしょに生活するようになった私に一つの悩みがあった。それは少年の頃から持っていた心の痛みで、それまではこれをおさえつけて過ごしてきたが、こうして寄宿舎で仲間と楽しく生活するようになって、新たな苦しみとして芽をふき、それがだんだん大きくふくらんできた。とりわけ愉快にはしゃいだ後などは、きまって反動のようにそれが頭をもたげてきて、心の重圧となった。そして、朗らかに談笑したり、何の悩みも持たないらしい友だちがうらやましいと思う反面、自分のこの悩みをなんとかしなければいけないと痛切に思うようになった。

その頃、同じ部屋の先輩にSさんという人がいて、杉崎瑢先生の家で行なわれていた聖書を中心にした集会に行っていたが、心の重圧に苦しんでいた私は、ある時思いきってつれていってほしいと頼んで、その人のあとについていった。この集会は、毎週木曜の夜開かれていたので、Sさんと私は舎監の先生に申し出し、その許可を得て出席した。この集会に集まる者は数人ではあったが、皆聖書を読んで、祈禱をするにも真実を求めて、神の前に赤裸々に自分を投げ出すようにしていたので、私もそのようにした。こうして、今まで内心に秘めて、独りで苦しんでいたものをすべて告白することにより、長い間私を苦しませたきずなから解放されたのであった。それ以来、私は聖書を愛読し、今日に至っている。

貧しい心の持主である私にとって、この二冊の本は今も豊かな糧を与えてくれるのである。

子どもの本を読む

稲垣勇一

本が人の一生にとって何であるのか、もう私は問うまい。過去の生活の中で、本そのものが答えきれないたくさんのものを私に与えてくれた。本のない私の少年期や青春、そして現在を考えることができない。

私にとって本がそのようなものであるのなら、私の子どもにとってもまた、本が生きることと切り離すことのできない一部であって欲しい。娘が生まれていつの頃からか、私はそう考えるようになった。子どもの本と私との意識的な出会いとその後のかかわりは、その時から始まる。

話は飛躍してしまうのだが、それから十年近く経った今、私にとって子どもの本は、単に娘のために父親が用意するだけのものではなくなっている。それは私自身の生活と思考のための重要な一部なのだ。

今、私は子どもの本を子どものためだけのものと受け取っていない。

優れた子どもの本の書き手たちは、決して「お子さまランチ」風な手軽さで作品を書いていない。薄汚れた幼児語や「オテテ」「オソラ」「パパ・ママ」式ことばを使うことで、軽薄にも子どもが見えたと思っている一部だめな子どもの本の書き手たちとは、全く別な場所で彼らは自らの作品を書き続ける。それは書き手の内部の中で、自己を誠実にぎりぎりのところまで追いつめ、凝視する、まさにその場から読み手に語り続ける。

戦後、創作児童文学の第一次高揚期を作り出した作家群がある。彼らを抜きにして、これからの日本の創作児童文学を語ることのできない優れた書き手たちである。

そうした中から生まれた作品に、例えば佐藤さとるの「だれも知らない小さな国」がある。それは、日本に本格ファンタジーの可能性があることを示した記念碑的作品である。そこに描かれているコロボックル（小人）たちの世界は、荒唐無稽な作り話の世界では決してない。内容に立ち入ることを省略せざるを得ないのだが、彼、佐藤はセイタカさん（人間）とコロボックルとのかかわりを追求することなしに、自らの青春を乗り越えて前へ出ることはできなかったはずである。佐藤さとる自らにとって、戦争とその後に続く敗戦としての戦後とは何であったのか。その中にいや応なしに埋没させられてしまった自分の青春とは何であったのか。その佐藤さとる的追求の記録が「だれも知らない小さな国」であると、私は考える。

たとえば、斉藤隆介の「ベロ出しチョンマ」がある。斉藤は佐藤たちとは別な場所から、やゝ時期を遅れて児童文学の世界に登場する。―おとなのための童話―と沿え書きされたこの作品集は、斉藤隆介の人間としての生き方の原型がきわめて文学的な形象をともなったみごとさで率直に展開される。残念ながら、そこには「ベロ出しチョンマ」以降の斉藤の作品の行きづまりをも暗示しているのであるが、この作品集そのものの完成度がそのことによって傷つけられるものではない。「ソメコとオニ」には底抜けの楽天性が持つ強さが、「モチモチの木」にはやさしさに支えられた行動のすがすがしさが、「八郎」には青春における自己発見の驚きが、激しさ・ユーモア・素朴さ・あいらしさ等の中で語られていく。

佐藤さとるにしても斉藤隆介にしても、子どもの本を書くということによる自己との妥協など微塵もない。こうした作家たちの作品である「子どもの本」に出会う時、それはもう娘のための本であることだけには留まってはいない。それは何の注釈や解説なしに、まさに私の本でもあるのだ。今、私の目の前にはそうした意味で優れた子どもの本が山積みされている。読み急がなければならない。

青木中学校教諭
上田子どもを語る会所属

学生時代の日記に思う

寺島己紀子

戸棚を整理していて、学生時代の日記に目が止まり、ページを開いてみた。

気の向いた時のみに引っぱり出される為、日付が飛び飛びになっているその日記は、ある時は憤慨の吐け口となり、又逆に、感激をそのまゝに報告する時の良き受け手となって、感情がそのまゝに表われた文字で埋められている。

読み進める内に、忘れかけていた数年前の事が、一ページめくる毎に、仲間の顔と重なって、思い起こされてくる。

学生々活一年目は、寮で過ごした。『男子禁制』の規則が、厳格に守られているその寮の入口で、入学式の当日、「父親の立入りも、禁ず」という先輩の言葉に驚かされて始まり、規則、規則で、縛られた生活であったが、さほど不満にも思わず、十時の消燈後は、ベッドに横たわり、体操の技の組み合わせを考え、暗い中、胸をときめかせるという毎日だった。昼はもちろん、空き時間を見つけては体育館に通い、練習に励んだ。しかし、だらしのない事に、全国から集まって来ている仲間達に、追い着き、追い越しするには、少々、努力と才が、足りなかったようである。それでも、在学中は、自分なりの練習を積み、その結果、身体のあちこちに、力こぶだけは、一人前以上に、ついたようである。母の言葉を借りて言うと、「風呂で、もり上がった背を、流すのが、せつなかった」そうである。おしゃれをしたくとも、着たいと思う物は、サイズが合わず、日常のほとんどを、トレーニングパンツで過ごしたが、男の様な、身体つきを気にするでもなく、むしろ「体操する者の体型」と誇にさえ思い、他校の女学生が、きれいに着飾って歩く様子を見て、「おしゃれの他に考える事、ないのかしら。」などと、仲間と話したものである。

二年目には、練習、一辺倒の生活だったそれまでに比べ、仲間と一緒に過ごす時間が、次第に増すようになった。何という事はなしに、茶をすったり、時のたつのを忘れ、討論をし合った。体操に関しては、「怠け癖」に付きまとわれた時期だったが、負け借しみの強い私、としては、「その間に、友情を深める事ができたのだ」などと都合の良い事を、考えたようだ。その頃親しくなった仲間のほとんどと、一度は、口論をした事を覚えている。日記にも、そんな時の事が、細かに、書かれている。読んで見ると、実に面白い。腹が立ったその時の事が、思い起こされ、今でも、その内容に、「そうだ、そうだ。」と、うなづいてしまう程である。しかし、その口論の結末は、といえば、ほとんどの場合、どちらからともなく折れ、私の場合、その不満は、すべて、日記の中に吸収され、時がたつのを待って、以前と、変わらぬ付き合いを、始めていたのが、常である。そして、再び意見が食い違った時には、己の主張を守りながら、互いの意見を認め合い討論するようになり、同じぶつかり合いは、無かったように思う。

最近までの日記をすべて読み返して見て、現在の、自分の態度一つ一つや、性格が、他人の事を見ているように、うなづける気がした。そして、今になって残念に思うのは、以前友人と、討論をし合った時のような厳しさが、最近の自分の日記から、感じられなくなっている事である。自分が、いびつな型ではあるが、ひとつの形に、まとまってしまいつゝあって、そのまとまり方が、とても、小さく感じられてならない。学生時代にもり上がっていた筈の背が、人並み程に平らになってきたのと同時に、情熱の炎も、小さくなったのか……。などと思うが、「そんな筈はない。」と、ウン歳の私が、反発をする。

「目に見える厳しさは、なくなったかも知れぬが、平素、人と交わる内に、その人の良いところを、吸収してやろう、としている自分に気がつくし、三日坊主も、中にはあるが、常に何かを始めようとしている、前向きの姿勢が、あるではないか……。」と、そして、「後を振り向くには、まだまだ早い。」と、叱咤激励しながらも、数年後、又この日記を読み返す時の事を思いながら、少々、気負った文で、その日のページを埋めた。

詩との出会い

二年　遠藤のり子

私が本を読む時は、何か外からのはたらきかけを必要とするようで、すすんで積極的に読書する方ではない。だから、誰かに勧められたとか、テレビドラマを見て、原作を読みたくなるとかというように、受動的な読書になる場合が多い。そういう訳で、私の読書は娯楽小説に傾きがちで、詩集など読んでみる気持にはなれなかった。それは、私が詩と出会ったのが、教材としての詩であり、嫌いな勉強の一つとしての詩であったため、詩のおもしろさが理解できなかったのです。また私は、詩を作ることも嫌いでした。詩とは、心の内を表現するものであり、私は、自分の心の中を表現することが、それを人に知られることが恥ずかしく、いやだったからです。そして、私が詩を作るなんて何か気どったことをするように思っていた。ところが、ある幼児教育者の本に、『教師は……詩人のようなやわらかい心をもっていたいものです。』とありました。この言葉は私には、大きなショックでした。これが、私の心の大きな刺激となり、詩をたくさん読んでみたいものだと思い、まず手始めに、石川啄木の詩集を読んでみた。しかし、私は、詩の世界に入ることができず途中で読むのをやめてしまった。

そして、最近あるきっかけで、「いちごえほん」という本を手にし、読みました。この本の作品は子供から大人まで、プロ、アマを問わず投稿された詩、童話、絵の中から選ばれたものです。詩の一つ一つ、童話の一つ一つに絵があり、私は、その絵にひかれて、詩を読み始めたわけですが、私の好きな詩の中に「うみ」があります。

おそらが
うみにおちました。
うみは
あんまりおどろいて
しろいなみをだしました。

これは、五才の男の子の詩です。とっても子どもらしい心が感じられます。この詩と一緒にある絵もまた好きです。このように私は、この本によって詩のよさ、おもしろさがわかりかけて来たようです。これをきっかけに、たくさん詩を読み、途中でやめてしまっていた啄木の詩も読み、それが読書にも結びつき、多くの本を読むことによって、心豊かな人間に成長できたらと思います。

思うこと

二年　小林幸江

私はひとと話をする時、その人の目を見る事にしています。この習慣は、意識的でなく、無意識のうちにいつの間にか自分のものになってしまっていました。

よく人は、目を見られると、心の奥までさぐられそうでいやだとか、目を見る事を嫌う人がいますが、私は目を見て話すのが大好きです。目を見ないと心が伝わってこないのです。真実が伝わってこないのです。その人の言葉のリズムや目の輝やきから、真実の度合をいくらかでも感じる事ができたらと思うのです。そして感じてもらえたら……と。

人の目から目に伝わる光は、その人そのものだと思います。光に化粧やベールをかける事はできません。だからこそ、自分自身その光に責任を持ち、大切にして普段からみがかねばならないものだと思うのです。

ひと筋に訴える光と、どんな事も暖かく受け入れる事のできる寛大な目の光、普段その人が、悲しみ、苦しみ、悩み、喜び、笑い……いろんな種類のいろんな度合の経験をする程、その光は磨かれてゆくのではないかと思います。

その経験をするにも、自分の心を白紙にし、その経験を濁らすことなく、塗り込んでいかなければ、と思うのです。自分の持ち前の好きな色の画用紙でなく、経験が、その色のまま映る、真白い画用紙が良いのです。

暖かい光を持って相手の話を聞けない人は、真白い画用紙に塗り込んだことのない人、相手を受け入れる心を持たない人だと思うのです。怪げんな色や、警戒の色で、心を塗るのでなく、誰もがお互いにホワイトで、相手をそのままの色で受け入れる事ができたら、と思うのです。自身難かしいことだとは思いますが、必要なことだと思います。

自分の心からの光を持って、変れる事なくいろんなひとと接すること、私のひとつの希望です。

ペルージアの一日

天田邦子

二週間の短い旅程のなかごろ、中部イタリアのアペニン山脈が走るウンブリア地方を訪れた。知人がいるペルージアで三泊することになったが、この丘の上の町は、市庁舎、ドォーモ、中央広場の一角を中心に、十三世紀以来の石とレンガの建物が入り組んで並んでいた。この古い町にも、かつて二十世紀のはじめ新教育運動が及んだ。「マリア・モンテッソーリ国際センター」の看板は、中央広場から少し坂を下った裏通りの、何げない壁に掲げられていた。実はこのセンターは今度の無計画な旅に組まれた、唯一の視察目的をもった場所なのである。同行の三人は、大学院時代の友人で、短大や大学の幼児教育科、児童科に籍を置いていたので、近年日本にリバイバルの動きがあるモンテッソーリ教育への関心を抱いていた。女史の生国であるイタリアでの状況などを見聞するのがその目的である。

八月の下旬、ドアをノックすると、エプロンをかけた助手の方が出て、来意を告げた私たちを室内に導いてくれた。センターは予想に反して、こじんまりとしていたが、ちょうどメキシコやラテンアメリカから研修生が集まり、静かに授業がすすめられていた。この機関は、若い頃モンテッソーリの秘書をしていたという所長さんを中心に、他大学から教育学、心理学の教授を招いて、八ヶ月間の研修コースを毎年設けているのである。

数年前まで幼稚園を開設し、盛んに実験的試みをしたという一階は、イタリア近年の政治、教育事情で既に閉鎖されていた。研修室実習用の幼稚園各室、小学校の教室は、すべて二階に並んで設けられていたが、建物の外側の古めかしさとは対象的に清潔で明るいことが印象的であった。折りしも夏休みを利用してこの研修所を訪れていたFさんは、かつてここで学ばれたこともあり、日本でも、そのメソッドを実践中のモンテッソーリアンで、私たちに一つ一つ室内の構造、教具、遊具を説明し案内して下さった。「子どもの心身に合わせた生活場面の再現としての子どもの家、感覚が研ぎ澄まされる方法、教具に含まれた教育意図の体系、子どもの活動の補助員としての教師の役割」などの原理を加えながら。

その後、授業を終えた所長さんと面談し、イタリアでの評価、普及状況、治療教育方面への活用のされ方、他の方法との相違と類似一日の保育実態などをうかがった。普及運動に全力を棒げる人の確信に満ちた返答は、細部までコミュニケートできない不便と、多少の疑問とを感じさせたが、翌日の再訪問の交流と合わせて、大要を知らしめてくれるものであった。その日の夕方、市内のペルージア外国人大学の夏期講座で、同所長の「子どもの言語習得」に関する講義も聴いた。帰路、ピザパイの食卓を囲みながら、疑問点の検討（幼児教育、心理学、生理学上の評価の反面、現代社会状況との関係の不明瞭性など）や、ここでも教育運動は、それを確信する人々によって、規模はどうであれ続けられている事情を話題としたのであった。

こどもの本の専門店
上田こどものとも社
英文堂書店
上田市海野町〒386 ☎0268(22)3934

新刊書籍・雑誌・
教科書・地図
株式会社 西沢書店
上田市中央3－1－12 電話22－0024(代)
西武デパート 5F 24－7111

クラブと私

一年　古川聡子

私はこの学校に入って、何気なく歴史研究会というクラブに入りました。そして、史跡めぐり・古墳の発掘などに参加しているうちに、今から千年も二千年もさかのぼった昔のことに興味を持ちはじめ、今では歴史、持に考古学なんていうと大げさすぎますが、そういう方面に大変興味を持っています。

私は今年の夏休みに、塩田城跡と青木村にある塚穴古墳の二つの発掘に参加しました。最初に塩田城跡に行きましたが、私にとってははじめての経験なので、発掘ってどんなふうにするんだろう、小さいシャベルで土器をこわさないようにていねいに掘っていればいいのかなあなどと想像して、軽い気持ちで行ったわけです。ところが実際に行ってみると、スコップや鍬で土を掘り、掘った土は一輪車やザルで運ぶのですが、かなりの重労働です。土方と同じだと思いました。私が想像していたことは発掘のほんの一部分にすぎなかったのです。最初の二、三日はいくら掘っても何も見つけることができず、土の中から出てくるのはミミズばかりで、おもしろくもなんともありませんでした。「発掘」なんてあんな穴掘りがどこがおもしろいんだと思う人もあると思いますが、私もこの時はそう思いました。しかし日が経ち、自分でも土器の破片などを見つけているうちに発掘が、土器を探すことが楽しくなってきたのです。土の上にちらっと姿をみせている土器を発見した時のうれしさはもちろん、土の中から土器を取り出し、これにごはんを入れたのかなあなどいろいろ想像してみるのも楽しいことです。

次に塚穴古墳に行ったのですが、古墳には前にない水晶の切子玉、勾玉などがでてきて、それらを見つけたときのうれしさは土器を見つけたときに増して大きかったようです。

このように発掘のおもしろさはやってみないとわからないように思います。私はこの夏休みに発掘に参加して本当によかったと思います。機会があったらまたぜひ参加したいと思います。

新着図書案内

世界大百科事典 全３５巻		平凡社
アメリカ哲学（上・下）	鶴見俊輔	講談社
日本文化論	梅原猛	〃
論理について	笠信太郎	〃
倫理学入門	吉賀正浩	東海大出版会
倫理学の根本問題	矢島羊吉	福村出版
愛（上・下）		現代思潮社
中国古典名言集（全６）	諸橋轍次	講談社
江戸時代図誌（5.9.11.16.20.21.22）		筑摩書房
遺跡の旅（1.2.3.）		学習研究社
信濃史源考	小山愛司	歴史図書社
戦後秘史（全１０）	大森実	講談社
世界人名辞典　西洋編・東洋編		東京堂出版
日本史辞典		角川書店
世界の女性史（1.2.3.6.7.11.15）		評論社
幼保一元化	持田栄一	明治図書
伝えあいの絵画教育		いかだ社
伝えあいの音楽教育		いかだ社
現代保育入門	横山明	風媒社
乳幼児の世界	刺使千鶴	鳩の森書房
教育相談事典		金子書房
犯罪と非行の心理	平尾靖	川島書店
ソビエトの保育		自治体研究社
現代家族の親子関係	小山隆	培風館
社会福祉のスーパービジョン		誠信書房
保母のための小児栄養	宮崎叶	光生館
乳幼児の精神衛生		岩崎学術出版
偏見の心理		培風館
子にとって母とは何か	エミール	慶応通信
しつけ	原ひろ子・我妻洋	弘文堂
西欧と日本の人間形成		金子書房
わが人生の断片上・下	清水幾太郎	文芸春秋
精神薄弱教育論	杉田裕	日本文化科学社
日本の幼児		明治図書
ちえおくれの子の機能の訓練用教材教具		日本文化科学社
日本の福祉はこれでよいのか		泰流社

編集後記

思を情適こかて現館　の目多母か校会野催日月るがにすかこます々とま理入ほもいを々料こう入報切たら、状に当がを数親りの一県さ、十よ高対まらうりるのがか由もし価るにと金の読燈。れ収なえのみをお短あみの・で関に図れ小四うますす最しと意物多せで経い格。ぎ新の頃書下た集資る要なふい大つは参老な係、書た諸・だっる図近た併識事いな思済本高当わ開値はの親いに料よ求さまて図たる加人く者各館一で十。て要書、背せのに。いう的の臆然し紙上公季しと力・うにんえも書。もにの、ば学大長開五十い求館ま景て高対人こにな購で本て上云共節む、